

「ゴシック」な世界観と「乙女」のアイデンティティ —あるストリート・ファッションをめぐる魂の現象学の試み—

西村 則昭

本稿では、思春期女子のアイデンティティの表明としてのあるストリート・ファッション、「ゴシック&ロリータ」と呼称されるジャンルを取り上げ、そこにみられる「魂の論理」を探求した。このジャンルに心酔し、実行する女子は、破壊的な「闇」の近隣に「私」の存在を見出し、そのポジションにあって、自覚的に、ことさらに「無垢」を生きることに、アイデンティティを見出していることがわかった。その背後には、サトゥルヌスプエラ（永遠の少女）のペアの元型が、見通されえた。また、彼女たちは「人形」に憧れるが、それは、「トラウマ」を想像することによって、失われた無垢を演じつつ、日常的な世界構成を停止させ、そこにおのずと性起する「静的な、永遠のリアリティ」（パトリシア・ベリィ）を、我が身の上に表現することで、「私」の存在の実感を希求していることだとわかった。幾多の想像的な世界観（虚構世界を構成する、感性やイマジネーションの特質とか、美意識とか、価値観といったもの）が享受される、この現代にあって、思春期女子の作り上げたアイデンティティのあり方のひとつが、浮き彫りにされた。

キーワード：思春期女子のアイデンティティ、魂の論理、サトゥルヌスプエラのペアの元型、想像的な世界観。

1. はじめに

思春期女子のアイデンティティの形成に際して、「外見」が果たす役割の重要性について、私は以前、臨床事例を提示しつつ論じたことがある（西村，2005）。そこではガーリー・ルックについて論じられた。本稿では、思春期女子のアイデンティティを表明する装いが、もっとエキセントリックに、もっとマニアックに、豊饒なイマジネーションで押し進められた結果出てきたと思われる表現、すなわち、「ゴシック&ロリータ」（以下、「ゴスロリ」と略称）と呼称される、ファッション表現について論じてみたい。

思春期女子特有の感性による、ゴシック趣味と少女趣味の絶妙なブレンド。そのイメージを端的にいうならば、三原ミツカズの掌編漫画「吸血鬼と僕」¹⁾に描かれる、吸血鬼の青年貴族に愛され、その館で暮らす、わがままな、人形のような美少女、ということになるうか。「死」、「闇」、「邪悪なもの」の傍らに存在する、気位の高い、可憐な少女。すなわち、縦ロールにした髪、ヘッドドレス、過剰なフリル、パニエで膨らませた膝丈スカート（ミニクリ）、その装いは黒を基調とする。そして日傘、厚底のエナメル靴、十字架、あるいは蝙蝠や骸骨、あるいは幼児的なマスコットのアクセサリ、魔女のような死人めいたメイクなどで構築される、デコラティブで、

あまりにも日常の現実を逸脱したスタイル。それがゴスロリである。それは、九〇年代の終わり頃、大阪のストリートに発祥したといわれている。

ゴスロリ趣味の子を前にすると、たとえその子が「ふつう」の装いであったとしても、情感深い、華麗なイマジネーションが溢れてくるのを感じる。ゴスロリは、彼女たちの内側からとめどなく溢れだすものに、明確な形が与えられたものである。ゴスロリに魅惑された女子は、その装いをすると、「本当の自分になれる気がする」とか、「とにかく落ち着く」と、よくいう。このようにゴスロリによって、魂としての「私」が現成するとき、そこにはどのような魂の論理が見出されうるだろうか。本稿では、ゴスロリの魂の現象学を試みたい。

ゴスロリの真髄は、ゴシック趣味と少女趣味の絶妙なブレンドにあると思われるが、そのどちらかに重点が置かれ、「ゴシック系」と「ロリータ系」に大別されることもある。だいたい、前者に傾くと、過激なパンク・ファッションふうになり、後者に傾くと、黒から白やピンクに変わって、甘く繊細な少女漫画のヒロインふうになる。しかし両者は、相反する派閥のようなものでは、決してない。なるほど対人関係の不安定で、偏狭な自らの価値観に立てこもりがちな思春期女子のことであるから、一部、派閥の意識をもつ子もいるようだが、それはゴスロリの本質とはあまり関係がないだろう。ゴスロリ少女にとって、ゴシック趣味と少女趣味のブレンドの仕方は、各人の興味と気分によって決まるといのが、実際のところである。ゴシック趣味は彼女たちの世界観を構成し、少女趣味は彼女たちのアイデンティティを形成する。

ところで、「世界観」という言葉ができたのは、西洋近代のことであると、マルティン・ハイデガーはいう。「世界像の時代」その時代、すなわち、人間主体が、この世界を客体化し、それに向かって侵略をおこない、それを支配しようとする時代になったとき、ひとは世界を像として思い描くようになった。それが世界観である。しかし現在、世界観はこの現実から独立して、アニメやゲームなど虚構現実のものとなり、より想像的(imaginative)なものとなった(西村, 2003)。現代は、さまざまな想像的な世界観が制作され、大量消費され、享受される時代である。また、そうした事態に呼応して、思春期のアイデンティティも、より想像的で多様なものとなった。ゴスロリはこうした時代の産物である。彼女たちの世界観とそのアイデンティティは本来、不可分なものはずである。それらの有機的な結合によって、ゴスロリというひとつのジャンル、ひとつの現象が成立する(この点、生粋のパンク・ファッションとは一線を画すことになる)。このことをしっかり踏まえた上で(現象学の鉄則は、まず現象そのものを視野にしっかりと確保することである)、考察していきたい。

2. 不思議の国のアリス

手掛かりは『不思議の国のアリス』である。

ルイス・キャロル(1832-98)の創造した永遠の少女、アリスは、特にロリータ系に傾く女子の偏愛するイメージのひとつとなっている。彼女たちは、奇妙な虚構世界を冒険する、年下の七、八歳のアリスに、想像的な同一化の恰好のモデルを見出した。『アリス』初版の、それを越えるものはないとまでいわれる、ジョン・テニエルの挿絵のアリスの装いは、ディズニーアニメにも踏襲されてあまりにも有名であるが、そのアリスの服をデザインし、製作販売していたロリータ系ブランド(Emily Temple cute)もあるほどである。

まずアリスが、ヴィクトリア朝期の良家の娘であったことを、確認しておきたい。この時代、

経済が繁栄し、生活水準が向上し、中流階級が台頭し、彼らの子どもは、家庭教師に就けられ、厳格な教育（道徳、礼儀に関して、とくに厳格）を施された。アリスもまたヴィクトリア朝の教育を徹底された「いい子」である。「アリスはいつでも自分を叱るのが好きな子でした」と、作者のいうように、彼女は厳格な教育者と同一化した「もうひとりの自分」によって、自分を律することがすっかり癖になってしまっているような子だった。アリスは異世界をひとりで冒険し、さまざまな奇妙な出来事に遭遇するが、その際、ここぞとばかりに学びの成果を発揮しようとすることがある。たとえば、『不思議の国』の冒険のはじまりで、アリスは落下しながら、よくわかりもしないくせに、自分の位置する「緯度と経度」のことを考える。アリスは、心細くなって泣いてしまうこともあるが、いつもちょうどいい具合に事態は好転する。そしてまた好奇心にかられて、冒険を続けることになる。

アリスの出遭う珍妙な人物や動植物は、ナンセンスなことをいって、彼女にからんでくる。彼らは怒りっぽく（それはヴィクトリア朝の神経質すぎる教育観の風刺になっているだろう）、アリスを戸惑わせる。しかし彼女は、そんなときも相手の感情を傷つけないように、失礼なことにならないようにと、配慮のできる「いい子」である。たとえば、『鏡の国』で彼女は、赤の女王様が差し出したビスケットを、そのとき喉がかわいてしかたなかったにもかかわらず、辞退すれば悪いと思って無理して食べたし、トウドルディーの滑稽さに対して、笑い声が自分の口からもれたとき、それをなんとか咳にみせかけた。しかしアリスは、彼らのあまりにひどい言葉の間違ひは、毅然として正すことも忘れない。珍妙で、易怒的で、支離滅裂な登場者たちは、アリスに一生懸命、自分で考えさせ、行動を促している、すなわち、彼女の自我の発揮を促している。その自我の現れ方は、いくぶん「ずれている」ところもあり、そこがなんともかわいらしく（魂を感じさせ）、その点にこそ、この作品の不壊の魅力があるように思われる。

奇妙奇天烈な世界の中で、アリスは自我を発揮し、主体であろうとしている。しかし考えてみれば、アリスの主体性の発揚を促しているのは、その世界を創造し、そこに珍妙な存在を配した作者である。キャロルは、オックスフォードの学寮に暮らす数学者で、生涯独身。堅物で、世事に疎く、対人関係に不器用なこの男が、唯一、リラックスした時間をもてたのは、思春期前の少女たちといっしょにいるときだったという。ここではキャロルの病跡²⁾に立ち入る余裕はないが、彼は思春期前の少女に「異性」としての魅力を感じるひとだったらしい。『不思議の国』は、学寮長の娘のアリス・リデルのために作った話のもとになっていることは、よく知られた事実であるが、キャロルにとって、少女たちが自分の語る話に、目を輝かせて聞き入り、活気づく様を見ることは、まさに至福のひとときだったにちがいない。ここで大切なことは次のことである、すなわち、少女たち（現代の読者も含めて）は、物語のヒロインに同一化し、胸を躍らせ、ヒロインの少しずれたところは自分も同じだと共感しつつ、想像の世界の中で「主体」であることを享受するだろうが、それは、キャロルの分身である登場者によって、ヒロインがとことんかまわれ、遊ばれる「客体」となることを通してである、ということである。ヒロインと、彼女に同一化する少女たち（聞き手）の自我が発揚し、魅力的に輝くことこそが、作者の欲望することである。彼はそこに無上の価値（魂）を見出すのである。『アリス』の物語の享受のされ方には、ヒロイン（＝読者少女たち）が、作者（＝男性）の欲望の対象（客体）とされることによって主体となる、という構造が認められうる。それは、児童期の少女たちにとっては、ほとんど意識されない構造である。彼女たちは、「男」（＝作者）の欲望の描く構図に、無意識のうちに巻き込まれていくことによって、主体性の実感を獲得するのである。

ここで『アリス』に惹かれるゴスロリ少女の心理について考えてみよう。思春期の彼女たちの心理はそんなに単純ではない。彼女たちには、アリスが、物語の表層では、活動的な主体であるが、その深層では、「男」（＝作者）の欲望のままに動かされ、見つめられる客体、いわば「人形」であるということが、十分透見されている。楽しく軽妙な『アリス』の世界の暗い不気味な「地下」の有様。それを承知の上で、いやむしろそこに抗しがたい魅力を感じて、彼女たちはアリスのポジションに自らを置き、その世界の只中へと、イマジネーションによって入っていくのである。特にロリータ系の女子は、ことさらに甘く幼児的な「乙女」の装いをしながら（彼女たちの小道具のひとつに、幼児が持ち歩くようなぬいぐるみがある）、地下の暗闇を自覚的に、想像的に、背負うことで（その背景は、ゴシック系に見られるように外見にあらわれることはなく、あくまで「背後」に沈んでいるにしても）、自らの姿形がよりいっそう甘美に輝くことを知っている。彼女たちはアリスに「同一化する」のではなく、アリスを「演じる」。「同一化」とは、与えられたイメージをそのまま我が身に受け取ることであるが、「演じる」とは、そうしたイメージの深層を見抜いた上で、それを我が身に、主体的に（ここがポイント！）、引き受けることであるから。

3. ダーク・エロス

ゴスロリの「ゴシック」な世界観は、壮麗な聖堂、天使や墮天使、吸血鬼、拘束具や刑具、王冠、ビスクドール、鳥籠（監禁の象徴）といった、ほの暗い中世的・耽美的・退廃的なイメージで、濃密に構成される。ここで、ことさらに甘く幼児的な装いのロリータ娘を思い浮かべてみよう。彼女の背後に隠されていた「闇」が、しだいにちやもやと立ち現れてくる。そしてその「闇」は彼女の身にも浸透して、彼女のシルエットはそのままに、全身黒が基調となり、病的なメイクの姿に変容する……ゴスロリ少女の生成である。

先に私（西村，2005）は、ガーリー・ルックを論じるにあたって、元型心理学派の Thomas Moore の『ダーク・エロス』（1990）を参照したが、その本で論じられている事柄は、ゴスロリの心理により妥当するようと思われる。そこでもう少し詳しく、この本の内容を検討していくことにする。『ダーク・エロス』は、Moore が、魂の邪悪な側面を、思い切って果敢に論じた本である。これはマルキ・ド・サド論である。

私は Moore の論に触発されて、澁澤龍彦の名訳でサドの小説を二、三読んでみた。それで直感したのは、サドの世界には、少女漫画と一脈合い通じるテイストがある、ということである。物堅い大人は、サドの世界を文字通りにとらえて、こんなことが現実になったら大変だと、反感をおぼえることだろう。しかし、日本の少女たちは、サドと軌を一にする、貴族趣味、暴力、近親相姦、吸血鬼などのテーマの満載された漫画を、現実世界とは別の想像界の事として、享受している。もちろんサドには、少女漫画の湛える深い情感は欠落している。それ故、そこで繰り返される残虐行為は、単なる強迫行動にしか見えなくなり、読んでいて退屈になる。しかし、少女漫画の残酷な場面に釘付けになる、思春期女子の感受性をもって（私がそれを想像しながらということだが）、サドを少女漫画のように読むことは、ある程度、私には可能のように思われる。そうすることによって、Moore のサド論が、いっそうよく理解できるように、私には思われる。もし少女漫画にサドが登場するならば、さぞかし彼は、憂いをおびた、神秘的な美青年に描かれるのではないだろうか³⁾。

日常の現実において、われわれがそれなりに自らの生を満喫しているとはいっても、そこで体験されている魂は、その一部分にすぎない。魂は、この物理的・社会的な現実によって、相当制限された形で、顕現している。日常の現実よりも、虚構現実の方にリアリティをおぼえるという、最近よく問題視される現象は、魂に、この現実を越えた側面があることを暗示しているといえる。このように抑制された魂の活動の、とくに抑圧の加えられた側面、「暗黒」の側面を、『ダーク・エロス』はテーマにしている。Mooreはいう、「サドという心理学者は、魂をより包摂し、より抑圧しないことによって、魂に奉仕しうる」(p.10)

サドの背徳の文学では、うら若き女性や少年を拷問する、放蕩貴族の饗宴が、念入りに、冗長に描かれる。犠牲者は拘束具をほどこされ、鞭打たれ、瀉血される(まさに吸血鬼的所業!)。神を冒瀆する言葉の数々。糞便にまみれた乱交パーティー。ときに犠牲者は死んでしまい、館をとりまく深い堀に、無情に投げ捨てられる。悪行に飽き、疲労すると、放蕩者たちは贅沢な食事をたらふく喰らい、哲学的議論にふける。そして精力を回復すると再び、儀式が始まる……。Mooreは、こうした放蕩者のスタイル、すなわち、肛門愛、儀式化された乱交、数字の強調、厳格な上下関係、過剰な抽象論、きびしい掟、宗教に対して否定的ではあるが、たえざる関心のあることにおいて、元型心理学派の流儀にならって、一柱の神をみいだしている。サトゥルヌスである。このギリシア・ローマ神話の憂うつな老人の神について、以前私は論じたことがある(西村, 1998, 2003)。ここで大切なのは、次のことである、すなわち、放蕩者と犠牲者の乙女の背後に、サトゥルヌスとプエラ(永遠の少女)の元型的なペアが認められる、ということである。Mooreによると、両者は対極の存在であり、それ自身では不完全であり、それ故にお互いを必要とし合っている。

サドは、創作において、自らを放蕩者(=サトゥルヌス)のポジションに置き、我が魂の片割れとしての「乙女」を、暴力的な仕方では体験することで、魂の全体性を描き出すことに成功したと考えられる。ここでゴスロリ少女のことを考えてみよう。彼女たちの背後にはたらくのも、サトゥルヌスとプエラのペアの元型であるように思われる。彼女たちが、その想像力豊かなパフォーマンスにおいて、自らを置くのは、もちろんプエラのポジションである。つまり、彼女たちは、サトゥルヌスとプエラのペアにおいて、プエラにアイデンティティを見出す。彼女たちはプエラの観点から、サドと共有し合う世界を想像的に享受する。想像的なレベルで、サドとゴスロリ少女は、同じひとつの世界をまったく対極の観点から眺めている。両者の目に映っている光景(世界観)は、相当異なったものとなっている。サドは、神聖なもの(キリスト教的なもの)や、美的なもの(アフロディーテ=ウェヌス的なもの、西村, 2003参照)を憎悪する。この点、耽美的なゴスロリ少女とまったく対照的である。しかしサドが暴力的な仕方ではプエラを体験したように、ゴスロリ少女もまた、彼女なりの仕方では、サトゥルヌスを体験することは可能である。その仕方とは、審美的なイマジネーションである。

Mooreはいう、「ウェヌスに対するサドの憎悪を評価し、しかもウェヌスの惑星をおとずれ、ウェヌスの恩恵に浴することは可能である」(p.13)。この引用から、Mooreが、サドのおぞましい世界に向き合うために、ウェヌスの加護をいかに頼みにしていたかが、覗えるように思われる。先に私は、サドを「少女漫画のように読む」といったが、それは少女漫画にはたらくウェヌスの華麗な彩りを、サドの物語世界にあえて添えるということである。この点、私もMooreと軌を一にする姿勢を取っているように思う。さて、それはともかくとして、この引用に語られている在り方こそ、ゴスロリ少女のサトゥルヌスとの関わり方であると思われる。審美的な彼女た

中には、ウェヌスの元型的加護がある。そのため彼女たちは、サトゥルヌス的＝サド的人物によって、自らの主体性を否定されることなく、ウェヌス、すなわち、美に対する彼の憎悪を、ある程度、そういうこともあるかと想像でき、自らの魂の暗い片割れとしてとらえることができるのではないだろうか。先に私は、もしサドが少女漫画に描かれるとしたら、彼の姿形がどんなふうになるかいったが、それはこうした審美的なプエラの観点からとらえられた、サトゥルヌスの姿形のことである。サドの美に対する憎悪は、憎悪をおぼえざるをえないほどの美への渴望として、とらえ直されるだろう。このようにしてゴスロリ少女の世界観は作られるのである。

先のガーリー論でも述べたように、ガーリーな子は自らの身体に、アルテミスの聖なる身体を感知する。それを「外見」に表現することが、彼女たちにとって、自信となり、強さとなって、主体性、外向性を成立させる。一方、ゴスロリの子はというと、サトゥルヌス＝プエラの元型的ペアの片割れであることを彼女なりの仕方でも自覚し、そうして顕現するプエラの身体の聖性を、それにふさわしい荘厳な仕方でも表現し、魂としての「私」を周りの世界に対して提示しつつ、本来の自分に還った「心地よさ」にひたる、内向的な楽しみを享受するのである。

4. 無垢を生きる

ここで再びアリスに登場してもらおう。『ダーク・エロス』にはエピグラムとして、『不思議の国のアリス』の一節が引用されている。サドとアリス。『アリス』に、無毒な「児童向け」のおとぎ話しか見ない「大人」には、まったくもってむすびつかないこの両者。しかし、「深み」を見通す、魂の感性を多少とももつひとならば、この両者、どこか深部でつながっているよう直感されなくもないだろう。このエピグラムをみたとき私は、わが意を得たりと思った。それは、アリスが、にせうみがめとグリフォンと、「勉強」について対話する場面である。にせうみがめはいう、

「おれはふつうの科目をとっただけなんだ」

「それってなんだったの？」と、アリスはたずねました。

「もちろん、まずは、Reeling (よろめき) と Writhing (もがき) さ」と、にせうみがめは、答えました。「それから、算数のいろいろ、Ambition (野心) に Distraction (放心)、Uglification (醜化) に Derision (嘲笑) さ」。

「あたし、Uglificationなんてきいたことないわ」と、アリスはおもいきっていいました。

「それってなんなの？」

グリフォンは、両手の爪をあげて、おどろきました。「uglifyingをきいたことがないなんて！」。彼はさげびました。「でも、beautify (美化する) ぐらいなら、知ってるよね」。

「ええ」と、アリスは自信なさそうにいいました。「それはね、つまり、なにかをかわいくすることよ」。

「それなら」と、グリフォンは続けていいました、「uglifyってなにか、知らないっていうんだったら、きみはほんとうにお子様 (simpleton) だね」。

例のごとく、キャロル一流のたくみな言葉遊びに、生真面目なアリスは翻弄され、混乱させられつつも、一生懸命に対応している。ここで大切なのは、次のことである、すなわち、アリスは、

「美化する」ということは、なんとか少しは理解しているが、「醜化する」はまったく知らない、そのことによって、彼女は「お子様」として、グリフォンに規定される、ということである。ここで「醜化する」というのは、意味のない、単なる言葉遊びであろうか。児童期の観点ではそうかもしれない。しかし思春期の観点からみると、そこにある「意味」が認められるであろう。思春期に突入した、とくに感受性のするどい子は、心身の奥底からたちあらわれる「性」とか「悪」によって、「子どもの私」が汚され、突き崩されていくような感じをもつ。「子どもの私」の汚染、それが「醜化する」の意味としてたちあらわれる。七歳のアリスにはそんな感覚はもちろんなく、グリフォンにいわれた事柄は、アリスの理解をこえている。しかし思春期女子は、このような意味の「醜化する」を、多少とも直感していることだろう。それは不安なことで、認めたくない気持ちもある。そのためことさらに自らを、「お子様」として、規定しようとする傾向も生じてくるであろう。少女漫画の世界では、大島弓子の作品をはじめ、愛すべき「お子様」のヒロインが、これまでくりかえし描かれてきた。たとえば、大島弓子の『いちご物語』（1975）における、一途な恋に生きるヒロイン、いちごは、「セックス」とは愛する男性と手をつないで寝ることだと思っている。読者の少女は、そうしたヒロインの無知を笑いつつも、そこに自らを重ね合わせることによって、思春期のわけのわからない不安でこわばった気持ちが、やわらぐのを感じるにちがいない。

ロリータ服が好きだといった、ある中学三年の女子は、恋愛には積極的な方であったが、性の交渉には反感をおぼえていた。それで「付き合い」がうまくいかないことがよくあった。彼女は私に、「そういうこと、嫌いな女の子もいるでしょ！」と、きっぱりいった。そのとき傍らには女友達があり、その子は彼女に、「そのうち嫌でなくなるって！」と、わけ知り顔でいった。しかし彼女は同意することなく、思いつめた頑なな表情のままだった。

Mooreはいう、「ナイーブなプエラ（少女）はしばしば、地下世界の近隣に自分自身を見出す。それはあたかも、自らの破滅へと牽引されているかのようである」（p.155）。この引用は、先のガーリー論でもおこなったが、ガーリーな「私」にしる、ゴスロリの「私」にしる、思春期女子の魂としての「私」は、こうしたプエラの事態が相当自覚された上で、その危うい均衡を「外見」に表現し、主体的に生きようとするところに、現成すると考えられる。ここで「地下世界」とは、心身の奥底のこととして理解できる。そこには、「性」のことはじめ、もやもやと不可解なものが、渦巻いている。まもなくそこに落ちてしまい、「破滅」、「死」を体験することになる宿命を、思春期女子は、漠然と予感している。そこでの「死」は「再生」につながる、つまり、彼女は「大人」になるのだが、今、自らの置かれた「途上」の状況に、底知れない不安を感じれば感じるほど、彼女には安楽に将来をながめる余裕などなくなる。そして、地下世界の近隣のはかない実存を、「外見」に表現しつつ、精一杯、今を謳歌しようとするのである。

ガーリーな子とゴスロリの子は、ともにプエラ・アイデンティティを基底にもつ。では、ガーリーな子とゴスロリの子の違いは、どのように説明されうるであろうか。ここでまたアリスにご登場願いたいのだが、今度は原作のアリスではなく、あの往年の漫画映画のスター、ベティ・ブープが演じたアリスである。どんぐり眼に、甘い歌声、官能的な肢体。ベティは、その官能性と幼児性とが、実にうまく結び合わされている点で、ガーリー的といえないこともない（ベティがガーリー的と考えられる根拠は、後述する）。ベティをデザインしたTシャツなどは、ガーリーな子によく似合うのではないだろうか。そのベティが、『不思議の国のベティ』（1934）で、アリスを演じたことがある。この作品は、ガーリーがどのような在り方なのか、改めて確認させてく

れ、それがゴスロリという在り方とどのように異なっているか、よく例解してくれているように思われる。

『不思議の国のベティ』を見てみよう。ベティは、うさぎの後を追って、不思議の国におもむく。彼女は、そこでも艶やかな甘い歌声を披露して、『アリス』の登場者たちの喝采を浴びる。突然、ドラゴンの登場。それは、『鏡の国のアリス』のなかの詩に登場する、飛竜ジャバウォック。そのナンセンス詩は、ドラゴン退治を詠っているが、あくまで詩の中の事である。一方、『ベティ』では、そのドラゴンが「現実」に登場し、アリス＝ベティを口にくわえて、攫っていく。助けようとする不思議の国の住人たち……。物語は、どたばたのうちに、ベティが夢から覚めて、終わる。

ベティ・ブープは、父権的で、実力本位の、「英雄神話」の生きられていたアメリカの生み出した、「男のための女」(femme à homme)の戯画である。そのベティが、アリスを演じたとき、物語が原作からそれていった、その展開の仕方は、まことに興味深い。いきなり「英雄神話」(英雄がドラゴンや怪物を退治して、囚われのお姫様を救出し、彼女と結婚するのが、その基本型)のモチーフが、物語の「現実」の真っ只中にはいりこんできて、物語の趣がすっかり変わってしまう。ここには、ガーリーなベティ・ブープと、アリスの本質を演じようとするロリータ系少女との違いが、浮き彫りにされているように思われる。

西洋社会では(その影響を受けた日本でも)、一般的に、「王子様を待つお姫様」が、結婚前の女性に投影されてきた。彼女たちの結婚までの時期は、男性の人生を飾る、男性の所有物になるための準備期間であると、傲慢な「男」の観点にとらえる。彼女たちは、男性の歓心を得るために、魅力的にならなくてはならない。男性が主体であり、女性は客体である。「男性的」とは「能動的」の謂いであり、「女性的」とは、「受動的」の謂いである。こうした男性優位の価値観の中で生きる女性たちに、同一化のモデルを提供していたのは、銀幕の女優たちであった。ベティ・ブープはそんな女優たちの戯画である。『不思議の国のベティ』では、ベティのキャラクターの「男のための女」の側面が、物語の本質的な変容を惹起したと考えられる。

しかし、戯画としてのベティは、「男のための女」を文字通りに意味しているわけではない。戯画とは、固定化した価値観を笑いで相対化する効果をもつ。ベティはそうした戯画さえ越えている。「キッチュ」という言葉がある。元来の意味をもはや提示せず、まがい物のように、ただそこにあるものの魅力、それがキッチュである。「男のための女」を演じつつ、その意味を脱落させていき、新たな魅力を提示するベティは、キッチュなイメージである。もしベティを「かわいい!」と思って、ファッションに取り入れる女子がいるとすれば、彼女は、真面目に「男のための女」に同一化しているのではなく、「男のための女」を演じながら、そこから抜けだし、別の魅力を醸成しつつ、主体であろうとしているのである。彼女はガーリー・アイデンティティをもつ。

ガーリーな子は、男性の価値観に左右されることなく、プエラの魅力を評価できる自分自身の目をもっている。彼女たちは、男性の価値観を一応認め、それを逆手にとる「媚」を知っているだけでない。もし自分自身の審美眼で、そこに自分らしさを認めることができたなら、彼女たちはベティ・ブープのように「媚」を実行する。一方、ゴスロリの子はというと、彼女たちは、この現実の価値観にはあまり関心がなく、この現実から独立した想像的な世界観に、安らおうとする。結果的に、その特異な世界観は、その高邁な美意識を解しない世の男性が、不用意に彼女に近づくことを拒絶する。こうして、ガーリーな子らが、友達と街へくりだし、そこで出遭う男子と気

軽に友達となり、快活に遊び、ときには媚を売り、街と共鳴し、街と馴染んで一体化するのに対して、ゴスロリの子らは、街中であって自らの世界観の中に閉じこもりつつ、独自のパフォーマンスをおこなうことになる。とにかく目立つゴスロリ少女は、大抵ふたりで連れ立って、街を行く。他の女子の怪訝な眼差しや、男子の好奇の眼差しを浴びて、まだ不慣れな子は、緊張気味で、足早である。所在なげに、街の隅っこに集まっている子らもいる。大阪の街では、見知らぬおばさんに、「がんばってや！」と声援をおくられることもあるという（それは大阪という街の懐の深さというものである）。

ゴスロリの子は、「ナイーブなプエラ」、すなわち、ロリータに徹することによって、その傍らの破壊的な闇の領域をきわだたせる。彼女たちは、無垢と闇の全体に想像をめぐらしながら、あえて無垢のポジションに自らを位置づけ、そこにアイデンティティを見出し、無垢を生きようとする。もちろん、無垢であることと、無垢を生きることとは、決定的に異なる。前者は、自然に与えられた状態であるのに対して、後者は、主体的に選び取られた在り方である。「乙女」として無垢を生きること、それは、アリスに表面的に同一化するのではなく、アリスの本質を演じることである。それには不屈の精神性が要求される。嶽本野ばらの小説『下妻物語 ヤンキーちゃんとロリータちゃん』（2002）のヒロイン、ロリータ系の服をこよなく愛する桃子はいう、

「だから私は大好きなお洋服と対等に渡り合う為に、ロリータとはいかにして生きていくべきかということを毎日、一生懸命考えたのよ。でもそれは、自分一人で独学で模索したというより、お洋服が教えてくれたの。私だっていろんな事で迷ったり、不安になったり、落ち込んだりするんだよ。でもそんな時はお洋服がね、どうすればいいかアドバイスをくれるの。そのアドバイスは、実にシンプルで、論理的で、尚且、常に有効なものばかりなの。他人に聞かせれば社会性を無視した我儘なアドバイスかもしれないけど、ロリータとして生きることを宣誓した私にとってはジャストフィットするものばかりなの。」

ここには、ロリータ・アイデンティティをもつということが、いかに主体的な努力の賜物であるかが、よく語られている。桃子は好きな洋服に導かれるという。以前私は、服の魂と主体の魂の融合によって、魂としての「私」が現成すると述べた（西村、2003）が、ここで桃子は、服の魂に導かれて、日常の現実の中でもがき苦しむ自らの魂を救い出し、それを形成し直し、そうして「融合」をはたそうとしているといえる。桃子はロリータ系で、すでに述べたように、「ゴシック」な世界観は、彼女の背景に沈んでいるが、やはり闇に隣接する無垢を生きようとしているところは、ゴスロリ少女と同様である。いや、黒服のゴスロリの子よりも、ロリータ系に偏向する子は、闇をことさら遠ざけ、ひたすら無垢に徹するという、闇と無垢のより緊張をはらんだ場を生きなくてはならないから、それだけ余計に、精神的な頑張りが要求されるに違いない。われわれの中の精神（spirit）こそが、われわれにとっての魂（魂としての「私」も含めて）を見きわめ、それを守り抜くのであるから。

5. 人 形

ゴスロリの子はよく「人形になりたい」という。彼女たちは、自らの分身のように、ストリートで人形を持ち歩くこともある。「人形」は彼女たちの理想像である。ここで「人形」とは、もちろん、「私はあなたの人形じゃない！」といわれるときの否定的な意味合いで受け取られてはいない。女性が男性に向かって、「私はあなたの人形じゃない！」というときの「人形」とは、

男性にとって都合のよい、男性の所有物、「男のための女」のことである。それは歴史的に、男性優位の意識、父権的な価値観が生み出してきたものである。ゴスロリの子の表象する「人形」は、そうした比喩的な意味ではない。たしかに思春期の人間関係のわずらわしさに傷つき、疲れ、そうして「感情のない」の人形に憧れるということもあるだろう。しかしそうした消極的な憧れを越えて、彼女たちは、人形という存在の神秘的な深層を、直観しているように思われる。彼女たちの理想像としての「人形」は、ゴスロリの心理理解のためのもっとも重要な鍵であると思われる。

人形とは、人の形をした物である。われわれは、人形に向かい合い、そこに自分自身や他の誰かのイメージを投影することができる。それは女兒の人形遊びに典型的にあらわれている。通常、女兒の人形遊びにおいて人形は、自分自身である。女兒の方は母のポジションに自らを置いて、自分自身に見立てた人形に話し掛け、可愛がるのである。もっとも、あまり人形遊びをしたおぼえはないといわれる女性の方も、すくなくないだろう。しかしそのような方でも、人形遊びの心理は、実感として理解されうるものがあるのではないだろうか。女兒には常に他者の目（母の目）がつきまとい、他者の目を通して、自分のイメージを探求し、自分の存在の確認をおこなっているものである。人形遊びはしていなくても、たとえば「女の子」の絵を描くことによって、それをおこなっていたことだろう。ゴスロリの子の人形への憧れも、こうした女兒の心理を背景にもつことをまず確認しておきたい。

ところで、ゴスロリの子が理想とする人形は、十九世紀後半にフランスで最盛期を迎えたビスクドールである。ブリュやジュモーの工房のものなど、まことに素晴らしい。現代では、それらの逸品を見て、不気味だというひともしいるかもしれない。たしかに不気味な雰囲気は私も感じるが、その不気味さがまた、その子のかわいらしさを深めている（これこそゴスロリ的感覚！）と、私などには思われる。しかし考えてみれば、十九世紀後半の贅沢な時代、ビスクドールを我が家に「お迎え」し、一緒に遊んでいた良家の令嬢たちには、「不気味でかわいい」などという感覚は、おそらくなかったであろう。彼女たちにとって、人形は、生活を共にする姉妹や友達のような、ごくごく日常的な存在であったことだろう。しかしながら、その日常性は、時代を経ると、もはや追体験されえないものである。日常性の払拭された後に残ったもの、それが不気味に感じられるのではないだろうか（こうしたことは、昭和初期、やはり卓越した職人技で製作され、大いに普及した市松人形に関してもいえよう）。しかし、このことは、人形に関しては間違いなく妥当しても、その他の玩具、食器や調度品などのアンティークに関しては、それほど妥当しない。これは、他の古物と異なり、人形がわれわれ自身を映し出す装置として機能するからではないかと思われる。

京都で人形専門の古美術商を営み、現代の人形作家に展示のスペースを提供する形で、後援もおこなっている、青山恵一はいう、

「よくできた人形は、その表情を八〇パーセントくらいのところで留め、あとの二〇パーセントを見る側に委ねてある。だから、買ったときは寂しそうだったのに部屋に飾ると嬉しそうな表情になった、とよく言われる。もとより、人形の表情が変化するはずもない。変わったのは、人形に託したその人の意識なのである」⁴⁾。

人形の表情には、その子を手した人のイマジネーションを受け入れる余地が空けてある。そのイマジネーションによってはじめて、人形の表情は完成される。そうしてその人形は、「お迎え」した人だけの子となる。しかし時代が隔たり、もはや昔の人形には意識を託せなくなったと

き、その表情は、二〇パーセントの空虚を、永遠に留め続けることになる。しかし人の形をしたその物には、まだわれわれ自身を映し出す装置としての機能は失われていない。したがって、われわれはその人形と向かい合うとき、われわれ自身が永遠の空虚の中に宙吊りにされるように感じるのではないだろうか（もっとも、青山恵一の店で昔の人形を買い求める、「昔の感性」をもった年配の人には、そういうことは起こらないであろう。彼らにとって、ある人形を我が家に「お迎え」しようと思った時点で、二〇パーセントの表情の空虚を埋めるイメージーションは、その埋め合わせに向かって、すでに作動をはじめているだろうから）。

人形の内側には空洞がある。そこには闇がある。その闇には底知れない深さがあると、私は空想する。そこから、じんわり染み出し、ゆっくりと湧き上がってくる人形の「表情」。しかしその幻想は途絶する。「表情」はいつになっても完成されない。人形の作りの立派さ（かつては凄い職人がいたものだ）は、物自体の細部をあらわにする。そして、永遠の空虚を、ただそこにあるリアルな物として、現前させる。それは「異界」へのリアルな扉となる。しかもそれが「私」である。人形は「私」を映し出し、「私」を「異界」へと開く装置となる。そうした人形体験は不気味である。しかしながら、それこそがゴスロリの子を魅惑するのではないだろうか。彼女らにとって、「かわいい！」とされる物は、その背後に無底の闇が透かし見られ、「異界」につながっていなければならない。

ちなみに、現代の人形作家（恋月姫など）の精巧な球体関節人形は、意図的にこうした無底の闇、永遠の空虚を作り出し、そこに神秘的な美を見出そうとしているように思われる。そうした球体関節人形たちも、ゴスロリの精神にかなない、ゴスロリの子らにこよなく愛されている。東京で私は、恋月姫の人形たちの小さな展覧会を見たことがあるが、会場を切り盛りしていたのは、思い思いのゴスロリの装いを凝らした数人の女性だった。人形たちは、もっともよき共感的な理解者である彼女たちによって、あたかも守護されているように、私には感じられた。

人形遊びに興じていた女兒もしいに、人形にイメージーションを掻き立てられなくなり、そこに映し出される自分自身の姿が薄らいで見えるようになっていく。そうして人形に空虚さを発見する前に、その遊びに関心を失ってしまう。無垢を生きようとするゴスロリの子は、かつての人形遊びの魅力を再発見するが、もちろんそれは、幼少期の単なる回顧趣味ではない。彼女たちにとって、人形へと投影される「子ども」としての自分は、その人形において永遠の空虚と交錯し、融合する。そこに「異界」の存在としての「私」が現成する。それこそが他ならない今の自分であることを、彼女たちは見出すのである。

ここで実際のゴスロリの子のあるべき立ち姿を検討してみることにしよう。以下の引用は、嶽本野ばらの小説『ロリータ』(2004)で、ロリータ服を着慣れないモデルの少女に、主人公の男がいうアドバイスである、

「いいかい、ロリータがカメラの前でポーズを付ける時には、幾つかの基本形がある。先ず、足は両腿をくっつけて、膝から下はハの字に開く。そして爪先は内側に向ける。手に関しては、脇を締めるようにして、肩から肘までは身体に固定する。バッグを持つ時も、日傘を差す時もこれは極力、崩さない。首は少し横に傾けて、表情はきよんとし、眼は大きく見開く。笑ったりする必要はない。どちらかといえば無表情でいい。出来るかな」

人形のような、放心の表情か、無表情。大きく見開かれた眼は、フランスの最盛期のビスクドールの眼（ペーパーウェイト・アイといわれる、ガラスの文鎮の取っ手のように盛り上がった瞳の眼）を、直ちに想起させるだろう。少し首を傾けた様子は、あたかも「異界」から来て、「ど

うして自分はこんなところにいるのだろう」と、この世の風景と、ここに自分が存在することを、不思議に思っている「振り」といってもよい。彼女の首から下は、神経のよく行き届いた、生命感のある「小さな淑女」の姿勢であるが、それだけに表情の欠如はきわだち、そこに永遠の空虚を作っているのがわかる。

ゴスロリの子は、「人形になる」ことで、幼少期の人形遊びを想起しつつ、無垢を生きることの実践をおこなうと共に、退屈で、味気なく、不快な刺激が多く、楽しめない、この日常の現実から、なんとか脱出を図ろうとしている。彼女たちは今の自己規定を脱し、しばし「異界」の存在として、自分自身の存在を強烈に感じるために、日常の時間の流れを停止させたい。そのためには何が必要であろうか。ここで元型心理学派の Patricia Berry (1982) の考え方を参照したい。日常的な世界構成をおこなうイメージーションが停止し、世界ががらりと一変してしまう事態がある。それは、ショッキングな事態、トラウマとなるような事態である。そこにおいて、日常の時間の流れの中では隠されていた、「静的な、永遠のリアリティ」(神話的世界)が見えてくる。そこから別のイメージーション、神話的なイメージーションがはじまると、Berry はいう。

人形という存在に思いをめぐらせ、無垢を生きつつ、「異界」の存在に憧れるゴスロリの子は、こうして「トラウマ」に憧れる。拘束具や刑具や監禁、そして血のイメージに、彼女たちが惹きつけられるのはそのためである、と考えられる。またトラウマは無垢な心にこそ、そこに衝撃的な形で刻印されるものであるから、トラウマと無垢とは近隣関係にある。トラウマは、人形の「永遠の無垢」をきわだたせる。恋月姫をはじめ、現代の人形作家たちが、猟奇犯罪の犠牲者ぶうの痛ましい少女人形を、あれほど好んで作りたがる理由が、ここにあるように思われる。もちろん通常のゴスロリの子は、臨床上問題となるような自己破壊衝動に駆り立てられて、実際にトラウマを自ら招く傾向をもつ者ではない。そうではなく、それを想像的に享受し、ファッションに表現しているのである。まさに多種多様の想像的な世界観の大量生産・大量消費される時代(西村, 2004a)の戯れである(とはいっても、自らの身体の上で演出される「ゴシック」な世界観が、その子がもともと可能性として持っている破壊衝動を行動化するきっかけを与えてしまったり、危険な人物を引き寄せてしまうことも、ないとはいえないが)。

ある中学二年の女子は、高校生の姉にバカにされ(いつものことだった)、喧嘩になった。いつもはこんなとき、無理して自分を抑えて「無視」していたが、このときは我慢がならなかった。そのとき彼女は、泣きながら、姉の大事にしていた黒いうさぎのぬいぐるみの耳を引き千切った。後で、そのうさぎがとてもいとおしくなって、姉にねだって譲ってもらった。彼女は自分で縫って、その耳を「治療」し、そこに包帯を巻いた(黒いうさぎだったから、包帯の白は際立ったことだろう)。ひとりでその作業をおこなっているとき、彼女は突然、「私の中のどこか暗い場所で、ひとりで泣いている幼い女の子」の存在を感じた。そしてほぼ同時に、「ゴスロリ」が閃いたという。「やろうとおもえば、私にもやれる」と、彼女は思った。それから彼女はゴスロリへの道を歩みだした(そのことはまたしても、姉の嘲笑を買うものとなったが、彼女は毅然としてその道を行った)。

この事例で、姉の愛玩対象だったうさぎのぬいぐるみが、やはり姉に弄ばれ、泣かされてきた自分の分身として、彼女に見えたということは、十分納得がいく。「傷」を負わせることで、それが自らの分身であることを、彼女ははっきりと自覚したようだ。その自覚は、ゴスロリ実践者として、魂としての「私」を探求する試みへと、必然的に、彼女を駆り立てていったようだ。ガーリーな装いが、幼児の頃からの「かわいらしさ」の探求のほぼ延長線上にあるのに対して、ゴ

スロリはあるとき突然、目醒めるものなのである。

トラウマを被って、「異界」に引きこまれ、人形になった少女。それがゴスロリの子の希求する魂としての「私」である。次に、以上論じたことのまとめとして、こうした「私」の在り方をよくあらわしていると思われる、あるひとつのイメージを提示し、検討したい。

それは由貴香織里の『天使禁猟区』5)のある場面に見られる。そこには、「いかれ帽子屋」(『不思議の国』の登場人物の名)と名乗る、悪魔(ピエロの顔)が登場する。またしても『アリス』である。『アリス』の物語の表層では滑稽だった登場者たち(作者の分身たち)も、思春期女子の感性がとらえるその深層では、不気味な相貌をおびて見られることだろうが、そんな思春期女子の感性がとらえた『アリス』の深層が、この場面では鋭く描かれているように思われる。この帽子屋は、男性でも女性でもない。帽子屋は、ある皇女を攫い、魔王の花嫁にしようと画策する。それは「花嫁」になれない自分の魔王への屈折した愛の証であった。かわいい黒い花嫁衣裳(まさにゴスロリふう)を着て、放心した表情の皇女を、帽子屋は、「純粹で無垢な誰にも汚す事の出来ない神聖なる姫君」と称える。そして彼女に自分の裸を見せて(漫画では後向き)いう、「わたくしはかつて薬を投与し、女性へと変化しはじめた自分の体の成長を止めた。天使とは初め無性で産まれて、後に性別が現われるのです。何もかも神が決めた運命の上を歩いていくのが嫌だから.... 事実、わたしの心は男でも女でもなかったのですから、女になるなんて気持ちが悪い」。この帽子屋の言葉には、ハンプティ・ダンプティがアリスにいった、あの言葉、「七歳でやめておけ(Leave off at seven.)」が、不気味に反響して聞こえる。

『天使禁猟区』は全体的に、兄妹近親相姦をはじめ、ショッキングなモチーフで、読者の日常の時間の流れを停止させ、「静的な、永遠のリアリティ」(Berry,P.)に触れさせ、神話的想像界へと誘う仕掛けに充ちている。帽子屋による、皇女の拉致・監禁も、そうした仕掛けのひとつである。皇女は、これまでの自らの人生で思っても見なかった、恐ろしい人間心理に接した(いや、帽子屋の成熟嫌悪の心理は、皇女自らが心の奥底で、どこか漠然と感じていたことかもしれない)。これから魔王に花嫁として捧げられる皇女は、逃走することも反撃することもできず、恐怖のあまり凍りつき(まさにトラウマの状況)、人形のような状態である。彼女のゴスロリふうの花嫁衣裳は、人形のように固まった皇女に、実によく似合っている。こうした皇女の姿はまさにゴスロリ的である。

トラウマを被り、世界が一変する。永遠に失われた無垢の存在が、不在という仕方次第で際立ち、少女は永遠の空虚の中に転落していく。そのとき「静的な、永遠のリアリティ」が見えてくる。それを他でもない我が身において表現するとき、そこにあるのは誰でもない「私」。それはもちろん、日常的・社会的な自己規定を自覚なしに受け入れ、無自覚なゆえに、誰でもなく、「みんな」の中に埋もれている、という意味ではない。そうではなく、「静的な、永遠のリアリティ」を体現し、神話的存在となることによって、日常的・社会的な自己規定を脱したという意味で誰でもなくなったということであり、そのことによってかえって「私」の存在そのものが浮き彫りになった、ということである。前者は、「私」の存在の眠りこんでいる状態であり、後者は、「私」の存在に真に目醒めている状態である。ゴスロリの子の希求する、人形としての「私」は、後者の状態の「私」である。ゴスロリふうの衣裳は、人形としての「私」にこそよく似合う、すなわち、そうした服の魂は、人形としての「私」によって、もっともよく活性化(アニメイト)される、といえる。あるいは逆に、そうした服の魂が、着る者の魂を導いて、人形のような「私」を実現させる、ともいえる。

註

- 1) 「ゴシック&ロリータバイブル」 vol.3, ヌーベルゲー, 2002年より
- 2) キャロルに対して, 精神医学, 精神分析の観点から, 「ペドファイル (小児愛者)」と診断がくだされ, 辛辣なとらえ方がなされるときがある。たとえば, 福本 (1999) によると, 『アリス』の物語は, 少女たちの歓心を買ひ, 彼女たちを「飼い馴らし仕立て上げていく grooming」のための道具である。それは, ある面, 真実かもしれない。しかしながら, そういったとらえ方には, 「魂の観点」が欠落していることはたしかである。アリスはキャロルにとっての魂のイメージである。そして, そのことをなんとなく納得した上で, アリスに, 魂としての「私」を見出すのが, ゴスロリの子であるといえる。彼女たちは, アリスに同一化しつつ, 作品の背後に今も生きている, キャロルという「男」の欲望の対象となり (あくまで想像上でのことであるが), その愛の眼差しを全身に浴びることに, 心地よさをおぼえるのではないだろうか。もしも現代日本で, 作品がこのように享受されていることを知ったら, キャロルの孤独な心は癒されるだろうか。
- 3) 大島弓子の漫画「ロジオン ロマーヌイチ ラスコリーニコフ」(1974) は, ドストエフスキーの『罪と罰』の漫画化であるが, 悪徳の権化のようなスヴィドリガイロフを, この漫画では, 女性的な謎の美青年の姿で描いている。
- 4) 緑青 vol.12 市松人形の系譜 マリア書房, p.7, 2001.
- 5) 私は以前, この漫画について, 思春期女子のイニシエーションの観点から論じたことがある (西村, 2004b).

参考文献

- Berry, P., *Echo's Subtle Body : Contributions to an Archetypal Psychology*. Dallas, Spring Publications, 1982.
- 福本修, 「アリスの仕掛けと限界—境界侵犯と反-成長の世界」, 日本病跡学雑誌第58号, 31-40頁, 1999.
- Moore, Th., *Dark Eros: The Imagination of Sadism*. Connecticut, Spring Publications, 1990.
- 西村則昭, 「妄想のある青年の心理療法」, 心理臨床学研究16 (2), 150-161, 1998.
- 西村則昭, 「アニマ・ムンディとしてのモード 魂の現象学の試み」, 人間学研究2, 21-31, 2003.
- 西村則昭, 『アニメと思春期の心』, 創元社, 2004a.
- 西村則昭, 「少女漫画『天使禁猟区』と思春期女子の心理臨床」, 心理臨床学研究22 (2), 105-116, 2004b.
- 西村則昭, 「ガーリー・ルックとアルテミス元型」, 心理臨床学研究23 (1), 掲載予定, 2005.

The “Gothic” Worldview and the Identity of “Maiden”
A trial of phenomenology on the soul around a street fashion

Noriaki Nishimura

In this paper, a genre of street fashion expressing the adolescent girls' identity, called "Gothic & Lolita" was taken up, and "the logic of the soul" seen there was pursued. It turned out that the girls who were fascinated with this genre and performed it would discover their existences in the neighborhood of the destructive "darkness", and find out their identities in living "the innocence" consciously. In the background the pair archetype of Saturn – puera(maiden) was seen through. Their yearning after "the doll" was interpreted as their wanting to express "the static,eternal realities" (Berry,P.) on their own bodies and existences by imagining "the trauma", performing "the innocence" which had been lost already,and stopping their everyday constitution of the world. A way of the identities which adolescent girls had made up in the days ,when many kinds of imaginative worldviews had been enjoyed,was brought into relief.

Key Words: the adolescent girls' identity, the logic of the soul, the pair archetype of Saturn – puera, imaginative worldviews